

営農技術情報

—畑作（大豆）—

平成30年 7月 6日発行

上川農業改良普及センター名寄支所 TEL01654-2-4524

JA道北なよろ TEL01655-3-2521

JA道北なよろ営農センターTEL01654-3-4307

～天候回復後の対応について～

(1)表面排水の実施

6月末からの長雨により、滞水しているほ場が見られます。

作物体が小さいほど、株の枯死等により被害が大きくなりますので、溝切りやポンプでの汲み出し等により、速やかに表面水の排水を実施しましょう。

(2)茎疫病の防除

病原菌は水分で移動するため、滞水した箇所では菌密度が高まりやすく、発病リスクが高くなります。また、土壌水分の高い状況が続くと発生箇所を起点に周辺に拡大します。ほ場に入れるようになった時点で、防除を実施しましょう。

【茎疫病の防除薬剤例】（平成30年7月5日現在の登録内容）

薬剤名	使用倍率	使用時期	使用回数	効果
リドミルゴールドMZ	500倍	45日前	3回以内	予治
プロポーズ顆粒水和剤	1000倍	21日前	2回以内	予治

※いずれの薬剤も、べと病にも登録があります。

(3)追肥(葉面散布)

地温が下がり、土壌水分の高い状況が続いているため、根粒菌の活性が低下していることや、大雨で肥料成分の流亡が予想される状況です

ほ場に入れる時点で、葉面散布、もしくは可能な場合は追肥を行なって下さい。

○葉面散布を行なう場合

尿素溶液0.5%（水量100リットル当たり500g）を2回程度実施して下さい。ただし、軟弱な状況ですので薬害回避のため高温時や高濃度での散布は控えましょう。

○開花前の追肥を行なう場合

①一般畑

追肥時期	追肥量
開花始め頃（7月中旬）	窒素4～5kg/10a程度

②水田転作畑（「道北転換畑における追肥対応（平成18年道指導参考）」より）

調査時期・方法	1個体の根粒数	対応
開花期に10個体程度を掘り上げ	10個未満	開花期に窒素成分で10kg/10aの追肥
	10個以上	追肥不要

①、②いずれも目安ですので、地力に応じて増減して下さい。

農薬を使用する場合は、必ずラベルを読み、使用量・時期・回数を確認した上で、適正に使用しましょう。また、周辺作物への農薬飛散には十分注意しましょう。